

peephole & exposure

1. peephole & exposure(1)

ある日、学生から電子メールがきました。「ぼくは、真面目なクリスチャンなのですが、おかしいのでしょうか。ウェブで遊んでいると、つい、自分の恥部をみせたいという欲望にかられて。しかも、そればかりか、つい他人の秘密の覗きたい衝動にかられて、いろんな冒険をしてしまいます。どうしたらいいのでしょうか。」という告白です。

そこで、考えました。

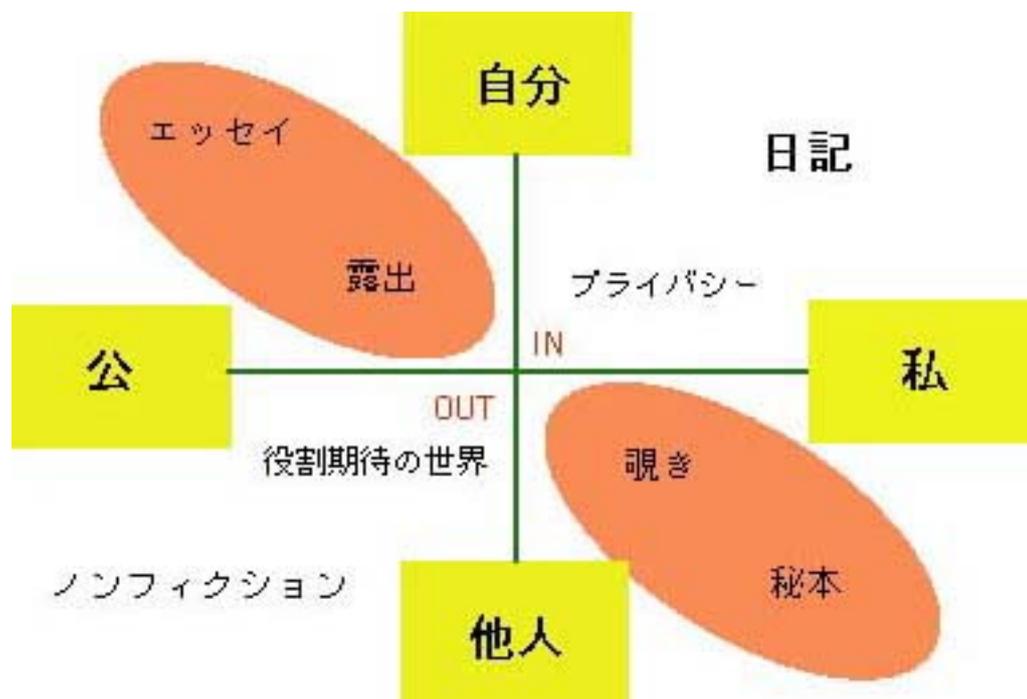
露出症と覗き癖は、自分と他人の間に引かれたみえない境界を超えるという意味では同じで、境界を超える方向が違うという点では対照的な関係にあります。この2つの欲望は、境界を超えることで、倫理的には悪い、とレッテルが貼られます。つまりぼくたちが生きてきた近代社会のルールでは、自分(アイデンティティともいいます)を他者に示すとき、その境界を超える(あるいは曖昧にする)ことはタブーなのです。アイデンティティとプライバシーはセットなんです。

そこで、整理しましょう。2つの軸を設定します。1つは、「私と公」の対照性です。私(プライベート)とは、「私(のもの・こと)にする」こととします。公(パブリック)とは、「公(のもの・こと)にする」こととします。もう一つ、「自分と他人」の対照性です。自分とは「自分のこと」で、他人とは「他人のこと」とします。これは、何・誰(自分・他人)を、どう(私・公)する、にかんする行為類型です。ここから、論理的には4つの行為類型が提示されます。

- (1) 自分を私にする
- (2) 自分を公にする
- (3) 他人を私にする
- (4) 他人を公にする

これは、いろいろ使えます。その行為に、「負の意味をもつ言葉」と「テキストの表現形式」をあてはめると、つぎのようになります。

- (1) 自分を私にする・・・隠す・秘する・・・日記
- (2) 自分を公にする・・・もるに出す(露出)・・・エッセイ 小説
- (3) 他人を私にする・・・覗く・・・秘本
- (4) 他人を公にする・・・暴く(暴露)・・・報道記事 ノンフィクション



peephole & exposure

1. peephole & exposure(2)

ここから分かる?ように、いまの社会では、基本的には、1)と4)のセットが倫理的に許される正当な行為で、2)と3)は許容されない逸脱という行為形式です。だからここには、自分=私というプライバシーの世界(IN)と、他人=公という社会的行動<役割期待の世界>(OUT)という行為だけが社会的な承認をえているのです。これにたいして、インでもアウトでもない曖昧な世界である、2)の露出と3)の覗きは、社会的に許容されません。

しかしネットワーク社会は、このルールを否応なしに、あるいはなし崩し的に、動かします。それは、露出と覗きを許容しないかぎり、ネットワークの社会が動かないからです。このネットワークの環境では、誰もが自分の枠をはずして、相互に自分をさらけ出し、同時に相互に他人のアイデンティティ=プライバシー(ホームページ)に遠慮なく侵入して、その人の恥部を覗くことが期待されています。最近流行のコラボレーションという共同作業も、このような欲望があってはじめて達成されることです。とすれば、自他の境界を一気に超えるきっかけになる、露出と覗きは、ここでやっと「いいことだ」と許容されます。みんな、ホームページで自分の日記を書いて、そして他人の日記を読んで楽しんでいますが、なにか谷崎潤一郎の「瘋癲老人日記」の真似事をしているようで、露出と覗きが病みつきになっていそうです。でも、これは病気ではなく、正気のことです。こんな新しい経験から、つぎの社会がうみだされるのです。